

地域ブロック情報



日本社会福祉学会には7つの地域ブロックがあり、それぞれに特徴的な活動が展開されています。今号では、関東地域ブロックおよび中部地域ブロックの活動についてご紹介いたします。

関東地域ブロックから

関東地域ブロック担当理事
荒井 浩道（駒澤大学）

関東地域ブロック（略称；関東部会）は、北海道、東北、関東、中部、関西、中国・四国、九州と7つある地域ブロックのなかでも最も会員数の多い、大所帯の部会です。運営をしていくうえで、大所帯ならではの難しさもあるわけですが、スケールメリットを活かしたダイナミックな取り組みも可能であると考えております。

関東地域ブロックのメインイベントは、研究大会です。例年、3月上旬に開催されています。昨年度の研究大会は、2020年3月8日（日）に、駒澤大学駒沢大学キャンパスで、「社会福祉学教育と専門職養成」をテーマに開催される予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大の影響を受け、中止の判断を行いました。

基調講演：白澤政和先生（国際医療福祉大学大学院）「社会福祉学教育と専門職養成」、シンポジウム：坪洋一先生（日本女子大学）「社会福祉学教育の今日的課題—原理・政策系科目を中心に」、久保美紀先生（明治学院大学）「ソーシャルワーク教育における社会福祉士・精神保健福祉士養成—そのビジョンを再考する」、杉野昭博先生（首都大学東京）、「学と実践のアイデンティティと専門職資格」、丸山晃先生（東京社会福祉士会）「福祉専門職の専門性と社会福祉学教育」、コーディネーター：中島修先生（文京学院大学）と大変魅力的な研究大会となる予定でした。自由研究報告も、26演題（研究報告部門8演題、萌芽的研究報告部門16演題、実践報告部門2演題）と多くのエントリーを頂きました。個人的にも、とても楽しみにしていたのですが、中止となってしまい誠に残念です。ご登壇予定だった先生方には、ご迷惑をおかけする結果となったことを深謝申し上げます。なお、自由研究報告については、抄録集をWeb公開することで公知となることから、発表は成立したものとして扱わせていただきました。

中止となった経緯をご説明いたします。2月上旬、研究大会委員会を開催し、自由研究報告

の座長、教場の選定を行いました。委員会の最後に、「いま流行の兆しのある、新型コロナウイルスの影響を考慮する必要があるかもしれない」という話題になりました。その時点ではまさか中止になることまでは考えておりませんでした。しかし、2月中旬、日本においても流行の拡大が懸念されるようになりました。決定的だったのは、厚生労働省が発表した、「イベントの開催に関する国民の皆様へのメッセージ」（2月20日）です。この発表を受け、運営委員会で協議し、2月23日（日）に中止の決定を行いました。

新型コロナウイルスの影響は、今後も暫く続きそうです。今年度も3月上旬に研究大会の開催を予定していますが、第2波、第3波の懸念もあり、これまで通りの開催ができるかどうか不安が残ります。開催のあり方をめぐり、運営委員会で議論していきたいと思えます。

このような状況下で、社会福祉学研究の停滞が危惧されます。ソーシャルディスタンスを保ちながら学術研究を進展させていく上で、学会誌が果たす役割は大きくなっているように感じます。関東地域ブロックでは、かなり早い時期からホームページの充実を図っています。

機関誌『社会福祉学評論』は、他誌に先駆けて、電子ジャーナル化を行いました。無料かつフルテキストで読めるということもあり、福祉系の専門誌において、『社会福祉学評論』に投稿された論文が引用されることも増えてきました。編集システムも整備され、メールベースで投稿・査読の作業を行えるようになっています。一般的に査読には時間がかかるわけですが、『社会福祉学評論』では、比較的短期間で査読を行うことが可能となっております。社会福祉学研究を停滞させないためにも、ぜひ研究成果をご投稿いただければと存じます。

関東地域ブロックホームページ <http://www.jsssw-kanto.jp/>

中部地域ブロックから

中部地域ブロック担当理事
谷口 由希子（名古屋市立大学）

中部地域ブロックの主な活動は、①研究例会の開催、②機関誌「中部社会福祉学研究」の発行、③大学院生・若手研究者のための勉強会の開催の3つです。

研究例会は、毎年1回、春の研究例会として開催しています。ブロック内会員による自由研究発表のほか、大学院生・若手研究者のための勉強会や、その時どきのトピックスをテーマにしたシンポジウムを開催しています。2020年度は、4月18日に愛知県産業労働センター（ウインクあいち）を会場に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、残念ながら中止とすることにいたしました。

中止となってしまいましたが、2020年度は、「見えない『助けて』と社会福祉実践」をテーマとしたシンポジウムを企画し、準備を進めました。社会福祉の実践は、支援の対象となる

「困っている人」が「助けて」という意思を表明することができれば、それを支援者が「支援が必要な状態」と認識することによって、ひとまず介入の根拠が成立します。しかし、社会福祉の実践には、本人の希望や「助けて」が見えにくいことがあります。例えば、「8050 問題」などと形容されるような、ひきこもりの状態にある中高年とその親。例えば、「ごみ屋敷」と呼ばれる環境で暮らす人たち。セルフネグレクトと呼ばれる状態にある人たち。彼／彼女たちは、「助けて」といえないのでしょうか、それとも、支援者が彼／彼女たちが発する「助けて」をキャッチできていないのでしょうか。あるいは、彼／彼女たちは「助けて」という概念をもっていないのでしょうか。そもそも、支援が必要かどうかは、誰がどのような基準で判断するのでしょうか。

シンポジウムでは、國分功一郎先生（東京大学）に「中動態の世界から見た社会福祉の支援」と題した基調講演をいただいたあと、被虐待児支援、精神保健福祉、高齢者福祉の各領域のシンポジストに報告をしていただく予定でした。

今回の春の研究例会では、このメインシンポジウムのほかに、自由研究発表が4本、「修士課程修了後のキャリア形成」をテーマにした、大学院生・若手研究者のための勉強会も開催予定でした。これらの企画については、中部地域ブロック部会幹事会において、来年度の実施に向けて引き続き議論を行っています。

なお、機関誌『中部社会福祉学研究』は、3月末に第11号を刊行しました。学会ウェブサイトの中部地域ブロックのページからダウンロードできますので、ぜひご覧ください。

中部地域ブロックサイト <https://www.jssw.jp/district/chubu/>